

A researcher wearing a hat, sunglasses, and a vest is standing in a field with trees in the background.

研究テーマは 観察から生まれる

教授

沓掛 展之 (Nobuyuki Kutsukake)

Q: いま一番知りたいことは？

動物がどのように生きているのか、何を考えているのかを知り、その生き様に感心する経験を大事にしています。動物の中では哺乳類が特に好きなので、いろいろな哺乳類を見てみたいと思っています。珍獣奇獣と呼ばれてしまうような種が好きで、アルマジロとかアrikuiとかカモノハシとかを観察してみたいです。

Q: 好きなものがそのまま研究対象になったのですね

はい、研究テーマは、実際の動物を見ていると浮かび上がってきます。それまでは、目的なく動物を眺めることが大事だと思っています。机上で考えたり、論文を読んだりしても、研究テーマを見つけることはできませんが、「百聞は一見に如かず」、自分の経験や五感を通じて得た謎や課題に優先して取り組むようにしています。

Q: 当該分野の今後の展望について考えていることを教えてください

動物行動学はいろいろな分野と交流しながら、新しい技術

を取り入れつつ、どんどんと発展しています。また、理論もどんどんと精緻になり、洗練化されています。そのような風潮にあっても、現場に出て、動物をじっくりと見るという泥臭い作業がますます重要になっていくと思っています。

Q: 研究をしてきて一番楽しかった瞬間、難しく感じた瞬間は？

動物に携わって生きたいと小さい頃から思っていたので、運良く、現在の仕事ができていることに感謝しています。昔の自分と同じような希望を持つ学生や若手研究者と一緒に研究できるということも、とても恵まれたことだと思っています。また、調査や学会などで、国内外のいろいろな場所に行き、様々な生物、人、風景、文化と出会うことができるというのは、研究をしていなければ得られない経験だと思っています。さらに、他の研究者が苦勞して発見した成果が詰まった論文を読むときには背筋が伸びる思いがします。難しく感じることは、自然環境が破壊され、多くの生物が絶滅に向かっているなか、自分の活動や研究が無力であることです。





Q: 先生の研究室を目指す学部生や大学院生の方にメッセージをお願いします

研究のやり方は指導で身につけることができますが、やる気や興味はそうはいきません。自分の興味を大事にしてください。観察やフィールドワークの経験があるに越したことはありませんが、自分も大学院に入るまで全く経験がなかったのもので、この点はあまり心配しなくてもいいのかもしれない。